



## 鉄器の導入と社会の変化

- 東北地方 -

斎藤 淳（青森県中里町立博物館）

東北地方においては、弥生後期～古墳時代に相当する3世紀～6世紀にかけて、石器の減少とともに鉄器の出土が散見されるが、南北の地域差が著しい。東北南部においては、土器群や墳墓の形態から北陸地方との関連がうかがわれるが、前方後円墳に伴う各種の鉄製品ならびに集落出土の羽口・鉄滓が報告され、すでに鉄の加工が開始されたと考えられる。一方、東北北部からは、北海道系土器を伴う土坑墓から刀子や農工具が出土する例が増加し、古墳文化との接触、活発な交流により鉄器化が進行する様子が看取される。

6世紀後半頃には、東北南部で大規模な鉄生産が開始され、北部では陸奥側を中心に終末期古墳が出現するが、この頃から東西（陸奥・出羽）の地域差が拡大傾向となる。特定の堅穴住居ならびに終末期古墳からは、従来の刀子や農工具に加えて新たに武具や馬具をはじめとする豊富な鉄製品が出土し、階層性の進行と鉄器の安定した流通が推測されるとともに、律令国家とのつながりを背景とした威信財的な役割が鉄器に期待されていたことが予想される。この頃から急増する集落からの鉄器の出土も一般的となり、鉄器の普及と畑作を中心とした開拓が表裏一体にあることをうかがわせる。

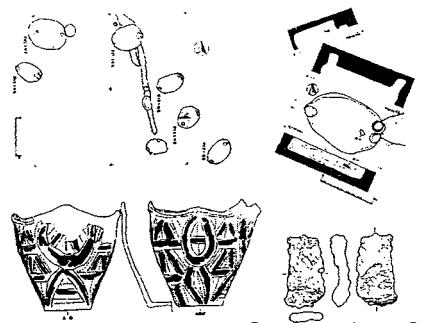
8世紀前葉には陸奥国に多賀城が設置され、周辺遺跡から製鉄炉・炭窯・鍛冶炉などが一体となつた鉄生産遺構が見つかっている。炉の形態等から北関東や東北南部との関連が考察されており、当該地方からの技術移入によって律令国家の管理の下鉄生産が行なわれた可能性が高い。生産された鉄器類は、城柵ほか東北北部の在地有力者層等へ配分されたと考えられる。一方出羽側では、8世紀前後に出羽柵（秋田城）が活動を始め、秋田周辺地域において若干の鉄生産関連遺跡が認められるものの、7～8世紀の集落は少ない。律令期の東北地方においては、律令国家が主導した鉄生産拠点を背景として、陸奥側の流通ルートが卓越していたことが考えられる。

9世紀前葉には陸奥国において志波城が創建されるが、城内からは多量の鉄器類と鍛冶遺構が検出されている。城周辺においても集落が倍増し、鉄器の出土量も増加するが、当該期の終末期古墳群においては次第に副葬品が簡素化する傾向が認められる。出羽側では、秋田城周辺において9世紀後葉ころの鉄生産関連遺跡が見つかっており、製鉄炉の形態から北陸との関連が考察されている。これらも時期はやや下るもの、陸奥同様、律令国家の主導の下技術移入されたと考えられるが、元慶の乱（879年）前後を画期として、鉄製産の主体は米代川流域ならびに津軽地方に移行する。

津軽地域においては9世紀後葉以降、集落の爆発的な増加に伴って鍛冶遺構が急増し、「1集落1鍛冶遺構」というような活況を呈するが、これらの現象は人口増と津軽平野の急速な開拓による鉄器需要を反映したものと考えられる。10世紀後葉には防御性集落が出現するとともに、米代川中～上流域・岩木山麓に複数の炉を有する鉄生産遺跡が操業を開始し、鉄・鉄器生産は最盛期を迎える。集中・專業的な生産形態であり、北方への広域流通を目指した操業と捉えられる。

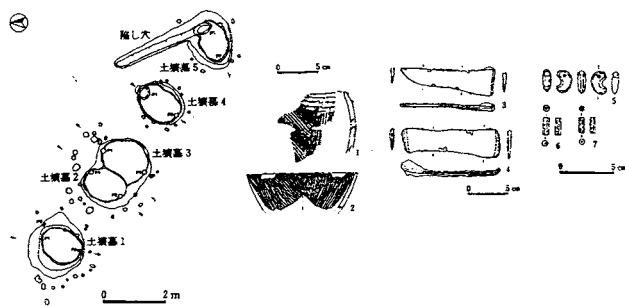
東北北部における鉄生産は、ほぼ防御性集落が廃絶する11世紀末頃まで続くと考えられるが、奥州藤原氏の下に統合される12世紀以降の鉄生産遺構は明らかでなく、南部鉄あるいは中国地方の鉄生産に集約された可能性がある。

Fig.1 寒川II遺跡(秋田県能代市):3C後



秋田県教育委員会 (ただし天野哲也 1997より転載)

Fig.2 永福寺山遺跡(岩手県盛岡市):4C前



盛岡市教育委員会 (ただし阿部義平 1999「蝦夷と倭人」より転載)

Fig.4 東北地方の墳墓と古墳



・馬頭器(馬頭～國分寺下屋式)  
・出墳墓の北限

天内山 TMI-1江刺古墳群

五城古墳群(カシムラノウツコブチ)

ウサクマイタフコブチ

若末期古墳の北限

御守町

北大式土器伴出墳墓の南限

高ヶ原下田下田

石柳城

寒川川

鹿角

遠山山

日向山

東山

西山

八幡山

鳥居山

鶴ヶ峰

五城山

Fig.7 十二林遺跡(秋田県能代市):10C前葉

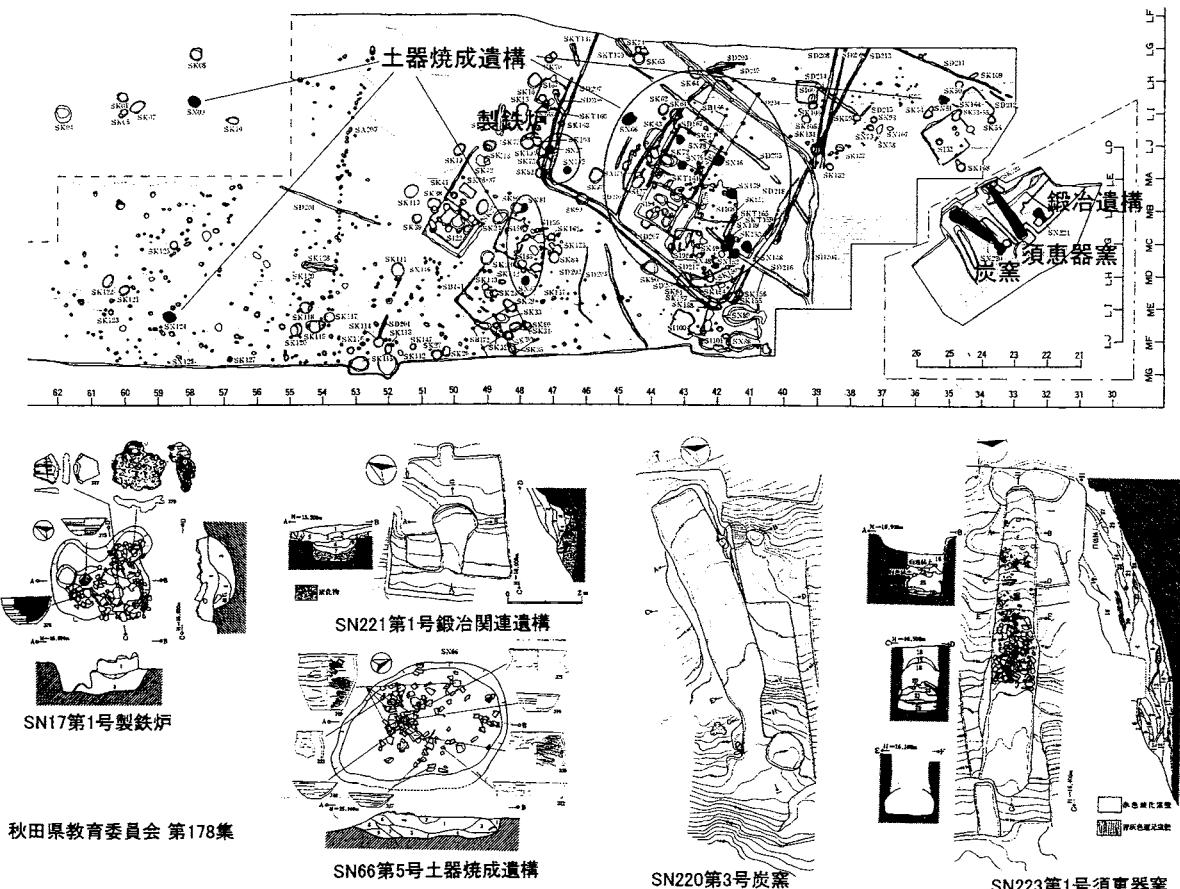


Fig.8 大平遺跡(青森県大鰐町):10C前葉～後葉

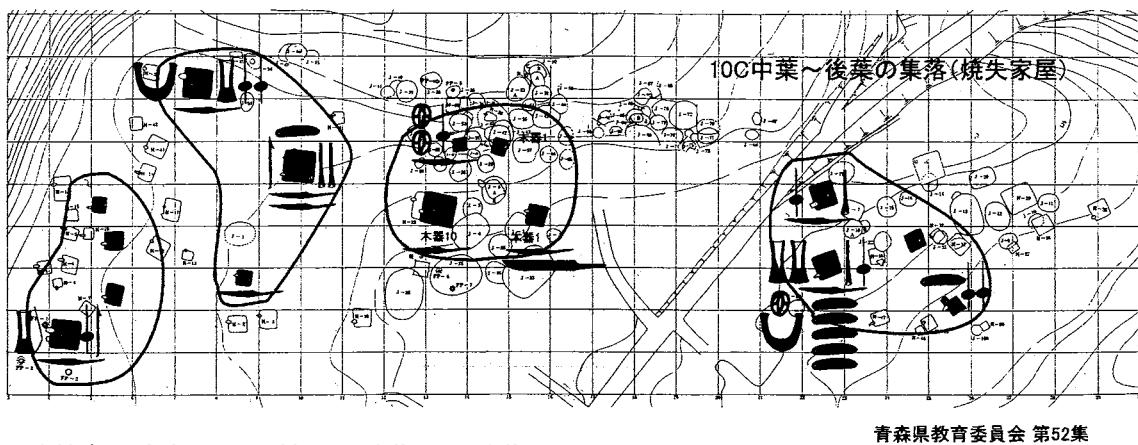


Fig.9 古館遺跡(青森県碇ヶ関村):10C後葉～11C後葉  
第47号跡:11C前葉

